

# 灯をもたらす

大学教育人間科学部教授  
山本美紀  
YAMAMOTO MIKI



「また、灯をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである。」

(マタイによる福音書第5章15節)

## はじめに

先日亡くなられた英国女王エリザベス二世は生前、「信じてもらうためには見てもらわなければならぬ」と、積極的に公務を含めた自分の日常を開示していたといえます。この時の「信じる」は、「国民」からの「信頼を得る」ということでしょう。

一方で、神様を信頼し、イエス様を信じる私たちの信仰は「見えないものに目を注ぐ」(コリントの信徒への手紙Ⅱ第4章18節)ものだというのです。しかし、先述のエリザベス女王が認識し行動していたように、人間にとつて信頼したり信じたりというのは、実際に見たり体験

もが日常や社会の出来事に心をとめ、そこに神様の御業(はたらき)を視る内容です。その中には《わたしはおやを(愛せ(さ)ない)》(詞／曲 平良愛香)といった現代社会の深刻な歪みから生まれたようなものもあり、衝撃と共にある種の共感をもって国際的な場でも受け止められたように思います。

また、私は今年度から「キリスト教文化に親しむ会」の一つとして、「賛美歌を創ろう!」という会を始めています。これは、30年ぶりに新訳となった『聖書聖書協会共同訳』を受けて、今こそ新しい賛美歌を創る時!という思いをもって始めました。現在5人の学生が集って賛美歌創作にチャレンジしています。夏休みには、『聖歌集』(日本聖公会)に賛美歌を提供する現役の賛美歌作家である宮崎光司祭をお招きして、夏季特別セミナーをもちました。そこでは海外の現代作家による賛美歌も紹介されましたが、その中で特に印象的だったのは“Lament: My Heart Is Breaking” (Words: Mark Miller & Adam M. L. Tice, Music: Mark Miller)でした。警官に殺害されたジョージ・フロイド氏の事件を契機に生み出された賛美歌で、YouTubeにも動画が提供されています。深いうめぎのようなハミングに始まり、終始押し殺したつぶやきの祈りの中に、理不尽さへのほろびる叫びを秘めた賛美歌です。

この“Lament:”と、先に挙げた現代日本の賛美歌《わたしはおやを》に共通するのが、賛美歌創作のインスピレーションの源となった

したりしなければ、そうたやすくできることではありません。イエス様の生前最も身近にいた弟子のトマスでさえ「実際に見ないと信じない」と、復活のイエス様に先に出会った兄弟弟子たちに断言します(ヨハネによる福音書第20章25節)。もっとも、これは他の福音書によると、復活したイエス様に咎められるほど、他の弟子たちも疑っていたようです(マルコによる福音書第16章14節など)。イエス様と実際に生活を共にし、日々近くでお話を聴いてきた者たちですらそうなので、2000年以上も後の、しかも気候も文化も何もかも違う私たちが、見ないで信じるなどというのは、ほとんど不可能といつてよいでしょう。「見えないものに目を注ぐ」見ないで信じる」など、「思い込み」「妄信」だといわれても、むしろその方がマトモな意見ではないでしょうか。しかし、聖書は「私を見たら信じたのか。見ないで信じる人は、幸い

事象を、目をそらさずに見極め、予定調和的な理想に収めてしまおうとしないことです。“Lament:”の中には、怒りや哀しみをそのまま歌詞に注ぎだしながら、その私たちの怒りさえも憎しみを溶かすために用いてほしい、という趣旨の言葉が出てきます。一方の《わたしはおやを》では、親を愛せない自分の苦しみや葛藤を何の飾り気もなく淡々と歌います。どちらも、「許さなくてはいけない」「受け入れなくてはいけない」などといった詞は一切なく、だからこそ、開かれた問いとして、賛美歌を歌う私たちに同じ目線から現実を問うのです。「これが神様が創られた世界なのか?」「あなたは、どうなのか?」と。その問いかけが神様への絶対的な信頼においてなされるからこそ、賛美歌として捧げられる祈りとなっています。

この夏集中してこれらの賛美歌に出会い、じっくりと味わうことよって教えられたのが、賛美歌がまさに「灯をもたらす」ものである、ということでした。

## 終わりに: “灯をもたらす” Lament

ここに、私たちの信仰の「目に見えないものに目を注ぐ」ことと「灯をともして——中略——燭台の上に置く」ことの結節点があります。

賛美歌作家は、賛美歌を通して社会や身の回りの出来事の中で、隅に追いやられていることや「無いことになっているもの」に光をあてたり、それらをよく見えるように明るみに出したりします。そうやって、神様のご覧になってい

である。(ヨハネによる福音書第20章29節)と「見ないで信じる」と、ささには、「見えないものに目を注ぐ」ことの価値を強調します。

## 灯としての賛美歌

この夏、アメリカ・カナダ賛美歌学会の設立100周年を記念した世界大会で、日本賛美歌学会より訪問団の一人として参加する機会を得ました。その際、現代の日本オリジナル賛美歌(歌詞も旋律も日本生まれ)を英訳した歌集『Let a Tiny Stone Shout Out: Imagining New Japanese Hymns 叫べ、小さな石よ』(日本賛美歌学会 アメリカ・カナダ賛美歌学会100周年記念国際大会訪問プロジェクトチーム編)を編纂することになり、その作業を通して、現代日本の賛美歌文化と共に、教会が置かれている状況に改めて思いを巡らすこととなりました。選ばれた32曲には様々なテーマがあり、どれ

る世界を、光も影もそのままに描き出すのです。それは、彼らに与えられた聖霊の灯といえるかもしれません。

私たち青山学院のスクール・モットー「地の塩、世の光」(マタイによる福音書第5章13—16節)が「地の塩となれ、世の光となれ」という命令ではなく、すでに「地の塩、世の光である」という宣言であるというのは、いつもいわれることです。聖書では続いて、塩として光としてのはたらきが説明され、冒頭に掲げた聖句がきます。これを読むと、私たちがすでに「地の塩、世の光」である限り、大切なのはその先だと促されていることに気づきます。今日のテーマでいうならば、私たちは私たち自身を光として灯をもたらし、見えないものを見るようにしていくことを期待されているのではないのでしょうか。

世の中には美しいものも、美しくないものもあつて、それは時に、独り占めしたいほど素晴らしかったり、逆に目を背け無かったことにしてしまいたくなるほど醜かったりするものもあるかもしれません。しかし、「悪人にも善人も太陽を昇らせる」(マタイによる福音書第5章45節)神様が私たちの神様である以上、見えないものに目を注ぐことを許された私たちは、どのような場にも灯をもたらす働きへと招かれているのだと思わされています。

YouTube  
「Lament: My Heart Is Breaking (Words by Mark Miller & Adam Tice, Music by Mark Miller)」

